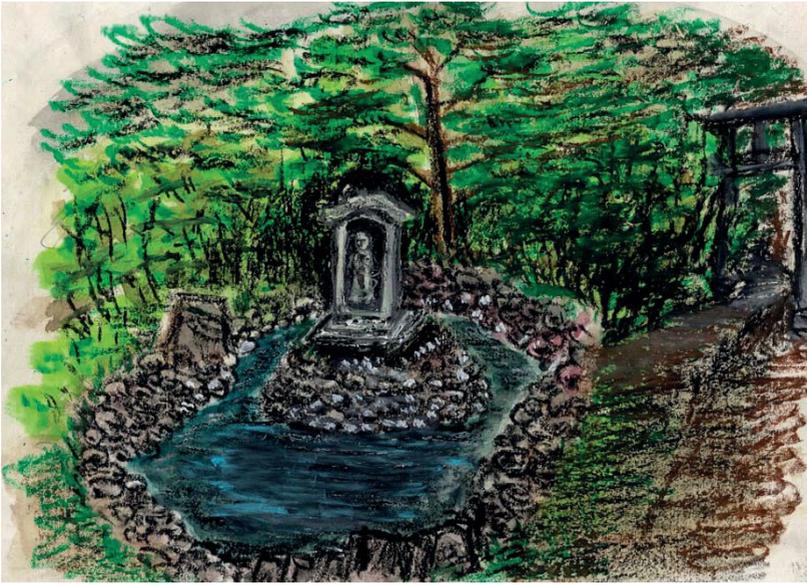




昔から長滝ながたきの村に、セツ滝というめずらしい滝
があった。

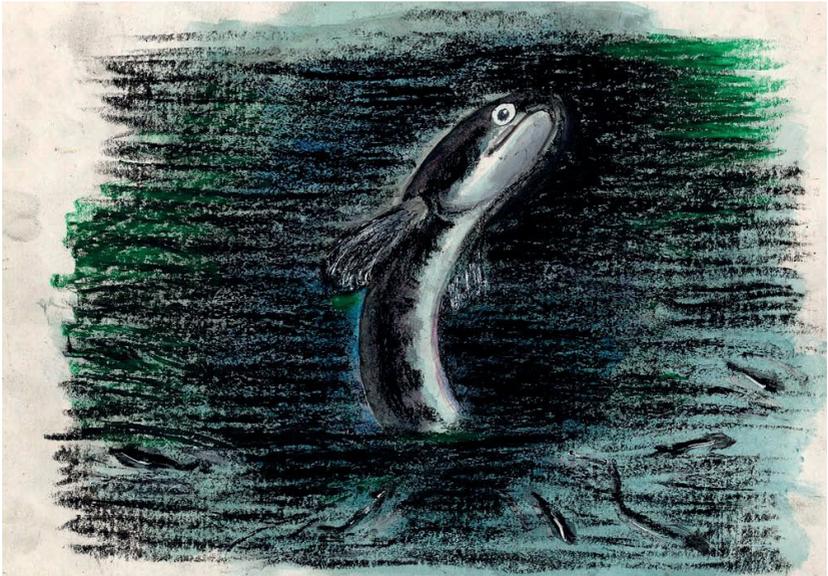
その滝は、上流から、大きい滝や小さい
滝が七つあり、それぞれに滝つぼがあっ
て、とりわけ、二の滝の滝つぼは深く、





遠く離れた、
上清水かみしみずの村まで続いていた
そうな。

この滝には、たくさんのお魚がすんでおった。
中でも一の滝には、大うなぎが住んでいて、
村人からは、滝の主と言われ、恐れられてい
た。





ある日のこと。村の若者が、何を思ったか、

「俺はなあ、今日こそ大ウナギをとって来て、みんなを驚かせてやるぞ」と、大うなぎを捕りに滝に出かけようとした。

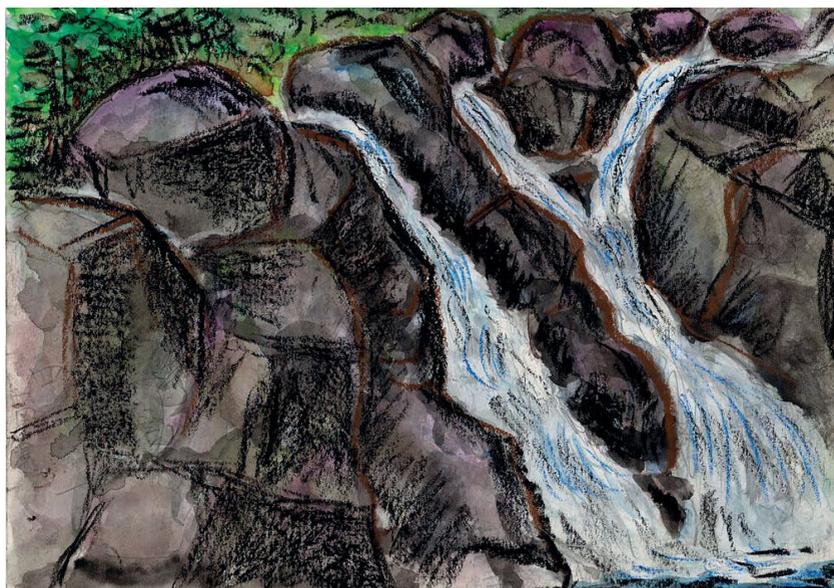
それを聞いた村人たちが、

「やめとけ、あの太うなぎは、滝の主だ。捕ったりすると、たいへんなことが起きる

ぞ」と言って止めたが、気の強い若者は

「そんなもん、迷信に決まっとる」と言って、出かけて行った。





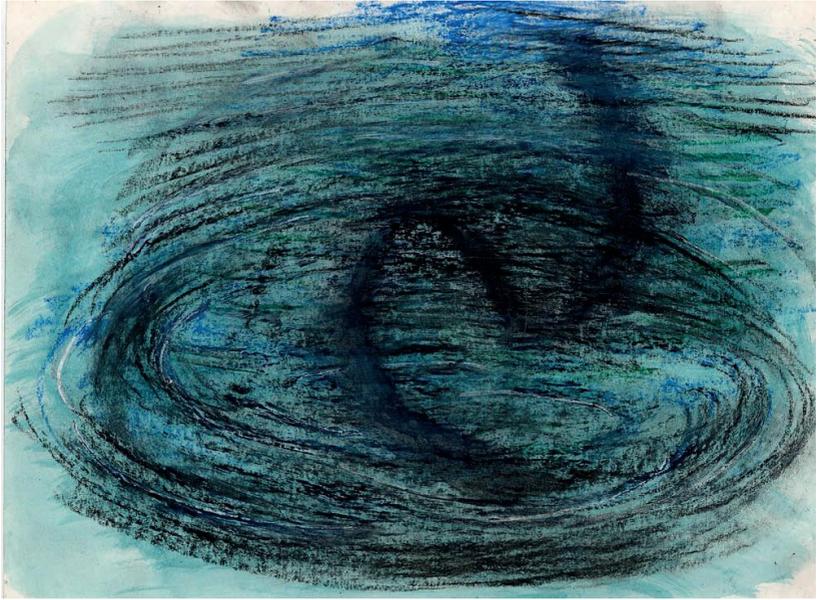
天気が良いというのに、滝の近くは薄暗く、
ドドッ ドドッと滝の音が響いていた。

何度、網を仕掛けても、網にかかるのは
小魚ばかり。

「あーあー。今日はだめか」

若者は網をたたみ、帰ろうとした。





と、その時。滝の奥で、ゆったりと動く
六尺ばかりの長い影が見えた。

「あれは、あれが大うなぎかもしれん」

若者は、はやる心をおさえて、その物影
めがけて網を投げ入れた。





「よし、今日こそ逃がすものか」と、若者は力いっぱい、網を引き上げようとした。

と、そのとき、「バシヤッ」という大きな音とともに、大うなぎは網を破って、スルリと逃げたかと思うと、滝の奥深くへもぐって行ってしまった。

「しまったあ」と、若者が滝つぼをのぞき込んでみると、遠くの方で、たくさんの人が、何か叫んでいる声が聞こえてきた。





若者があわてて、声のする方を見ると、なんと村の方から火の手があがっているのが見えた。

「あー、村が燃えとる。おれの家かもしれん」

若者は、息を切らして村に向かって走りながら

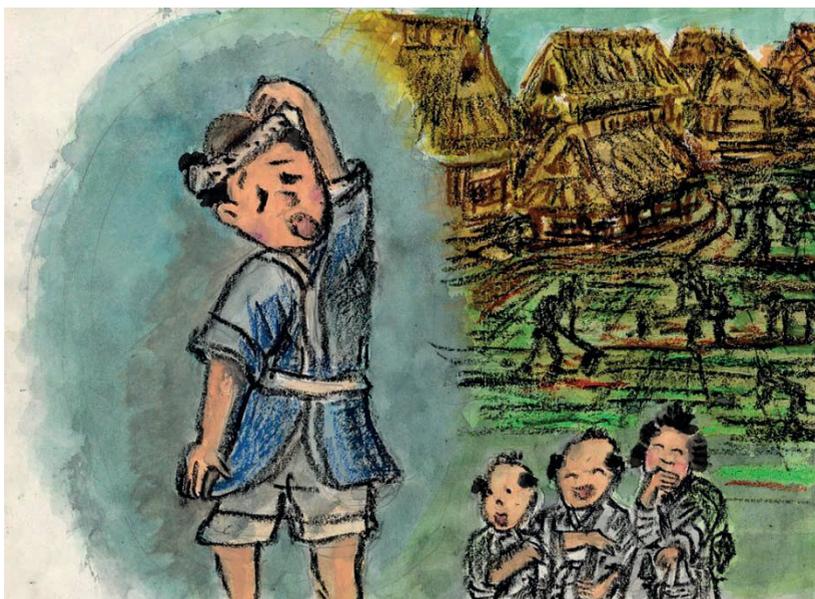




「わあ、火事だ、火事だ」と叫んだ。

ところが、村は何事もなかったように、
しーんと静まりかえっておった。





若者の叫び声を聞いて、家々から出てきた村人は、ただならぬ様子で青ざめている若者をながめているだけだった。

気がおかしくなった若者は、しばらく床
についたまま、家の外には出られなかつ
た。

それからというもの、この村では、大う
なぎを捕りに行くこととする者は、もうだれ
もいなくなったということぞ。

絵・後 泰夫

